

糖尿病治療の最前線

糖尿病にマスクされた肺炎の症状

気管支肺炎を風邪と思いこんだMさんのケース



担当医 久保 明

医学博士・
糖尿病内分泌専門医
東海大学医学部教授
高輪メテICALクリニック院長

患者氏名

M・N様

年齢

57歳

性別

女性

現病歴

糖尿病、高血圧、バセドー病

私

自身も驚いた、ある患者さんの症例をご紹介します。20年近く糖尿病にかかっておられるMさんのお話です。

Mさんは、血糖値が100mg/dl前後、ヘモグロビンA1cは6%台で、それほどコントロールが悪い状態ではありません。今年の3月上旬のことでした。「数日前から咳が出て、風邪のようだとクリニックにいられたのです。Mさんは血糖値も安定しておられるし、これといった合併症も出ていないので、私も単なる風邪だと思いました。しかし、念のために胸部のCTを撮ったところ、肺に影が見えて気管支肺炎であることがわかったのです。

糖尿病が進行すると体の免疫機能が低下するため、感染症にかかりやすくなります。糖尿病の感染症には、壊疽などの皮膚感染症がよく知られますが、肺炎も注意するべき感染症のひとつです。

ただ、糖尿病の方は、そうでない人に比べて、肺炎の症状がはつきり現れないという特徴があります。こうした現象を、医療の現場では「症状がマスクされる(隠される)」という言い方をします。

例えば、血糖値が高いと痛覚の位置が変わるため、心筋梗塞になっても痛みが出にくいことがあります。これも糖尿病があることによつて症状がマスクされていると言えます。Mさんの場合も、高熱や胸の痛みといった肺炎特有の症状が出ていなかったため、てっきり風邪と思いこんでしまっていたのです。

のどの痛みや鼻水、せきといった症状は風邪によるものですが、ひどくなると肺炎に発展することがあります。糖尿病の方は、風邪が長引いたら、肺炎を疑ってみる必要があります。「そのうち治る」と放置すると重症となる場合もありますので、早めに主治医を訪ねて診断を受けるようにしましょう。